校長室だより～燦燦～ №６２５

聖光学院

2022.9.20

あれから約一か月である。聖光学院高校野球部の快進撃に歓喜し、仙台育英高校野球部の夏の甲子園、全国優勝から感動をもらった夏である。もう一度振り返ってみる。

日本大学第三高校、横浜高校ともに全国での優勝経験がある強豪校である。そして敦賀気比高校も強豪校である。この３校を撃破した時点で少なくても準決勝に進出していてもいいくらいである。だが、聖光学院高校の試合は１回戦からだった。この１試合多い分が後々影響した。

聖光学院高校は、１３年連続出場を成し遂げた甲子園の常連校である。だが、最高成績はベスト８だった。この夏は、九州学院を破り、遂にベスト４に入った。仙台育英高校もベスト４に残っており、東北勢同士の決勝かと一瞬期待したが、両校は準決勝であたってしまった。

聖光学院高校は、今までも甲子園で伸び伸びと力を発揮している。加えて今回のチームは強かった。よく打った。強豪校にホームラン２本で逆転した。守備もすごかった。仙台育英高校の須江航監督が、聖光学院高校の守備が一番だろうとコメントしていた。

斎藤智也監督なくして聖光学院高校野球部はあり得ない。聖光学院高校は、これからさらに強くなるだろう。今までは見えなかった準決勝の景色を見ることができたわけである。全国の舞台での決勝戦に届くところまできている。

甲子園連続出場が１３年で途絶えたことが聖光学院高校を強くしたのではないか。斎藤智也監督はインタビューの中で、甲子園の舞台にもう戻れないのではないかという不安があったことを話している。負けることから学ぶことは多い。勝っているときには、なかなか気づかないものである。

福島県が誇る GReeeeN が、準々決勝後にこんなコメントをしていた。

福島県勢５１年ぶりのベスト４　聖光学院史上初のベスト４　おめでとうございます！！！
雨の中の熱戦、感動しました　これまでの『軌跡』がさらなる『奇跡』へと
準決勝 東北対決も　不動心・一燈照隅の心で全員主役の夏を。

そして、準決勝後にも。

全員主役の熱い夏　福島県の高校野球に新たな歴史が刻まれました。
最後まで戦い抜く姿勢に、涙しました。誇りを胸に福島に帰ってきてください！
甲子園で鳴り響く『キセキ』心打たれました。
「心」と「人間力」そして仲間と果敢に戦った選手・関係者の方々にエールを。

今や全国から選手を集めたからといって勝てるわけではない。夜遅くまで厳しい練習をしたからといって勝てる保証はない。そんな高校は、全国にたくさんある。やはり指導者である。ここのところ、全国で勝ち進む学校の指導者は変わってきたと思う。厳しいだけでは選手はついてこない。指導者自らが勉強しなければならない。絶対的な優勝候補と言われながら準々決勝で負けてしまったにもかかわらず、相手校の監督に握手を求めに行った西谷浩一監督の姿は印象的だった。斎藤智也監督が、どれほどの量の本を読み、自分自身を磨いているか。花巻東高校の佐々木洋監督もそうである。

他にも人間力を磨いている監督さんは多いはずである。甲子園では、全国の監督さんの人間性が試されているのかもしれない。そんなことを考えるようになったのには、一人の監督さんの存在がある。仙台育英高校野球部の須江航監督である。次号で、この人物のことを振り返ってみる。